史編纂部　昭和十八年）五－六頁。本書はリプリント版（山本四郎校訂　日本図書センター　平成三年）を利用。

68 『讀賣新聞』昭和十四年五月二十一日付「第一夕刊」。「ヨミダス歴史館」を利用して閲覧。

69 この点は、佐藤卓己『『キング』の時代－国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店　平成十四年）に於ける雑誌『キング』に対する評価に依った。

追記

三菱史料館伊藤由美子氏から岩崎家関係文献に関して貴重なアドヴァイスを頂いたことに深謝したい。又、今回も原稿を成す上で、多くの人士の御陰を蒙ったことを記して、ここに感謝したい。

近畿大学の関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、この点は諒とされたい。

原典尊重の観点から引用史料の表現・漢字は、原則として、そのままにしている。

本広報の一行の文字数と引用した原史料のそれが違う為に、改行が原史料の通りになっていない場合は諒とされたい。

アーカイヴズ研究活動報告

第二期勉強会開催報告

第六回（通算第十五回）勉強会
（平成二十九年六月二十三日）

稲葉研究員と冨岡研究員からアーカイヴズ関係文献（稲葉研究員：菅真城「大学アーカイブズ考２題－私立大学・認証評価－」『レコード・マネジメント』、第七十一号（二〇一六）、冨岡研究員：和崎光太郎・小山元孝・冨岡勝「学校史資料論の構築に向けて－活用と分類・学校統廃合・アーカイヴズ－」『近畿大学教育論叢』第二十八巻第二号（二〇一七））の報告がなされた。続いて、荒木研究員から、第二期調査・研究の進捗状況として、中央図書館調査と校史関係史資料調査の報告がなされた。また、田窪研究員より学会（アート・ドキュメンテーション学会）参加報告がなされた。更に、一〇〇周年記念誌編纂小委員会について、同委員会と建学史料室が両輪となって記念誌の編纂を進めていく旨などが報告された。

その他、本プロジェクトの計画の修正などについて報告がなされた。

（法学部教授
建学史料室研究員　上﨑　哉）

近畿大学を巡る史資料　9
－『東南アジア留學生の招致と其の展望』－

国際学部准教授
建学史料室研究員　酒匂　康裕

今回、本学の歴史に関する史資料として紹介するのは、『東南アジア留學生の招致と其の展望』（以下、『東南アジア留学生』）である。『東南アジア留学生』は昭和二十八年に開始された本学の給費留学生制度により来日した留学生に対する教育を巡る様々な内容が記録されたものである。発行日は昭和三十二年（一九五七）四月一日であり、近畿大学留学生運営委員会により発行されたものである。また、不倒館にて所蔵が確認され、『国際交流研究』創刊号（近畿大学国際交流室、一九八五）にも同内容が収録されている。

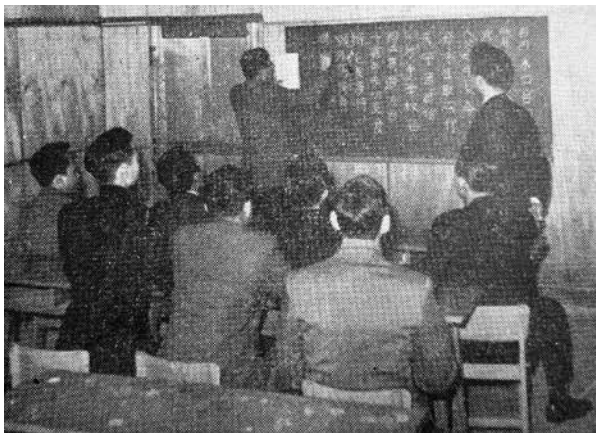
まず、『東南アジア留学生』の内容構成は次の通りである。

一　解纜
　留学生招致についての本学の目的　留学生いよいよ到着す　留学生の待遇条件

二　最初の蹉跌
　事件の発端　事件の真相　大学側の腐心　留学生に関し識者に訴う　総長の心意気

三　現況
　留学生運営委員会と留学生教育の基本方針　見学旅行と実習　協力を得た諸団体へ感謝す　関西留学生協会設立の提唱と経緯　本学留学生の卒業並に在校生の名簿　東南アジ

『東南アジア留學生の招致と其の展望』表紙


日本語の授業

ア諸国における留学希望情況
四　成果
留学生は卒業後要職につきつつある　教育上の結論
五　結語
「アジアは一つ」　諸外国の留学生招致状況　情報提供の必要　要望される当局の強い関心　反日分子の養成ということと　留学生指導の要領　当面の課題（イ）留学生の健康保険制度の確立（ロ）「日本留学者クラブ」（ハ）転換期のインドシナ三国（ニ）日本への留学資格は再検討を要す

ここには、留学生招致の目的から始まり、留学中の様子、本学における留学生の受け入れ体制と外部機関との協力体制、留学生の卒業や帰国後の状況、留学生教育の経験を通じた課題提示などがあり、留学生教育全般に関わる記録であると言えよう。この給費留学生制度の大きな特徴の一つとして、留学生の待遇条件が挙げられるであろう。待遇条件は、「授業料、学費（実習費、学友会費その他の納入金）は一切免除で、月二万円（宿舎費及び賄費一万円、小遣五千円、旅行見学費五千円）を支給され、なお緊急の病人に対しては病院で充分療養させている」とあり、留学生にとって大変恵まれた待遇であったことがわかる。文部省による国費外国人留学制度が発足したのが昭和二十九年であるが、これよりも一年早くこのような制度を設けていたことは、当時の本学における留学生招致および教育に対する関心の高さが感じられる。また、『東南アジア留学生』には当時総長であった世耕弘一先生の心意気が窺えるものとして、この事業を創るに際して書かれた「留学要項」からの引用もされており、留学生に向けて次のように述べられている。

遠く故国を離れて、風俗、習慣、気候の違つた日本で生活されるのであるから、ご両親も心配であろうし、諸君も不安であろう。私も若い頃暫く西欧に留学していたから、諸君の心情は充分に推察することが出来る。私は教職員や学生と一緒になつて、諸君が不自由なく、楽しく勉強できるように全力を尽くすつもりである。

さらに、来日してから徐々に日本での留学生活に適応していく過程が詳細に記録されている。来日後、一定期間が過ぎた頃の日本語の授業に関しては、「解り始めると面白いので、此の頃では競争で覚えようとしている」ことや、留学生向けの科目につき「これらの教養の学科については英語で講義されている日本唯一の大学である」などの記述もあり、現在本学において増えつつある英語による講義が当時実施されていた記録であると言えよう。

留学生教育の目指すべき姿の一つとして、留学生が日本を知り、理解する親日家として本国に戻り、その後も日本との交流の架け橋となる人材の育成という点が挙げられるであろう。『東南アジア留学生』の「五結語」には、「『かつて日本に遊学した多数の中国人が反日分子の先鋒に立つたが、そういうことのないように留意してください』ということを屢々耳にした」との記述も見られる。しかし、「今日ではそういう心配は著しく減じている」とし、続いて「留学生指導の要領」の最初に「一番大切なことは『心からの親切』である」ことが書かれていることから、かつてのアジアに対する差別的な扱いから脱し、本学としての留学生に対する基本姿勢が示されたものと考えられる。

留学生と一般学生のディスカッション

国際交流や国際化という用語は現在、日常頻繁に目にするが、一見すると華やかで楽しいものと映るであろう。しかし、背景の異なる人同士の交流は価値観や思考等の違いにより、時には大きな誤解や摩擦が生じるものである。『東南アジア留学生』では華やかな面のみならず、本学における昭和三十年代にあった国際交流の現場における生々しい記録が残されている史資料であると言えるかもしれない。

現在、本学では様々な国際交流が行われ、今後もより活発になると思われるが、『東南アジア留学生』はかつての本学における国際交流への姿勢や取り組みの一例を理解する上で貴重な史資料であると言えよう。